

本の紹介

特集 新しい国立追悼施設構想をめぐって
高橋原

2003年11月に開催されたシンポジウム「新しい追悼施設は必要か—若き宗教者の発言」をベースに、国際宗教研究所は『新しい追悼施設は必要か』（ペリかん社、2004年3月）を刊行した。ここに至る背景には長く議論が続いている「靖国問題」があることは言うまでもないが、最近の動きとしては、2001年夏に小泉純一郎首相が8月13日という微妙な日付を選んで靖国神社に電撃参拝し、内外の反対派の反発を招いたことをきっかけとして、福田康夫官房長官（当時）が「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会」（追悼懇）を設置し、最終的に、国立の新しい追悼施設の必要性に言及する報告書を出した。その後、小泉首相は、2004年1月1日に首相として4度目の靖国神社参拝を行ったが、8月15日の終戦記念日には参拝を見送り、大きな動きはないまま現在に至っている。新しい追悼施設の建設は棚上げにされたままであるが、靖国問題が徐々に新しい局面に入りつつあることは確かである。大ざっぱに言えば、靖国神社の国家護持をすすめ、首相の公式参拝を支持する勢力が一方にあり、他方にはそれへの反対派が存在する。この反対派の中から、靖国神社に代わる新追悼施設建設

を推進する人々が現われる一方、「第二の靖国」誕生を危惧する声も上がっている。さらに、むしろ以前からあった千鳥ヶ淵戦没者墓苑を有効活用すべきであるという流れも出来上がりつつある。本稿では、最近の出版物を紹介しながら、すでに歩み寄りの糸口も見えなくなっている政治・法律の観点ではなく、宗教の観点からこの問題を考えてみたい。それはつまり、首相の靖国神社参拝が憲法の規定する政教分離原則に違反するという批判や、首相の靖国神社参拝に対する中国や韓国の反発が内政干渉であるという主張、そしてそれらの根本にある、大東亜戦争が侵略戦争であったかどうかという評価の問題、これらとは異なった切り口から問題を見ようということである。

まず、「反靖国」の立場からのスタンダードな読み物となっていると思われる、田中伸尚『靖国の戦後史』（岩波新書、2002年）を見てみる。この本は、終戦から現在までの歴史を年代順に追ったもので、さまざまな論点を取り上げられているのではあるが、クローズアップされているのは望まれない合祀の問題である。事故死した自衛官が、クリスチャンである遺族の反対にもかかわらず、護国神社に合祀された問題が、著者が靖国問題に関わるようになったきっかけだという。他にも、浄土真宗僧侶の戦死者や、韓国人・台湾人の戦死者が靖国神社に合祀されている問題もとりあげられている。遺族が、浄土真宗の神祇不拝の姿勢を主張しても、韓国人・台湾人兵士の戦争被害を訴えても、いったん合祀されたものは取り下げられることはないという。

彼らは英霊として、「戦犯」とともに祀られたままである。

このように、この本の靖国批判の一つの掘り所は、個人の思想、良心の自由である。追悼という行為に個人の内面に関わる宗教性を認め、それが支配されたり侵害されることを拒否するのである。したがって当然、新しい国立追悼施設建設についても否定的トーンが読み取れる。本書の最終章には、「第二の靖国」は必要なく、「国家は死者をそれぞれの家族に返せ」という真宗（大谷派）僧侶の言葉が引かれている。なお、田中氏は新追悼施設のテーマを中心とする、『国立追悼施設を考える―「国のための死」をくり返さないために』（樹花社、2003）というブックレットも出している。

次に、靖国神社を支持する典型的な立場を代表するものとして、大原康男編『「靖国神社への呪縛」を解く』（小学館、2003年）をとりあげる。序文で次のような認識が示されている。「本来、靖国神社に関わる議論は、ふだんは物言わぬ多くの国民がひそやかに抱いている英霊追悼の思い心耳を傾け、その真情を汲み取ることに主眼をおくべきなのだが、…議論の場がそのように〔引用者注・憲法問題と近隣諸国の反発という二大テーマに〕設定されてしまっている」。そこで、この本でも多くの頁が割かれているこの二大テーマではなく、その「本来の」テーマに注目してみると、武田秀章論文において、「祖先の霊を、ある時は仏として尊び、ある時は神として崇める」ということが日本人の祖先観であるとされて

いる¹。また、戦死者の遺書に見られる、「自らの死によって子孫たちによき未来がもたらされることの願い」「死後も国土に魂を留めて子孫達の行く末を見守っていこうとする静かな祈り」という思想が、「近代日本人の死生観・永世観の精髓」であるとされ、靖国神社は近代日本の戦没者に対するもっとも包括的・恒常的慰霊施設であると位置づけられている。そこからすると、追悼懇の無宗教の追悼施設は、「みたまの籠もらない形骸のみの施設」と酷評されることになる。この本では追悼懇の報告を、中国からの文化干渉を交わすための姑息な手段であるとして批判し、とりわけ、宗教性のない追悼とある追悼を区分して、前者のみを国立施設で行うべきだという追悼懇の議論は、追悼の精神を引き裂き、人間の精神を愚弄するものであると痛烈に批判される。

以上、まったく対照的な二冊の本を並べてみたが、とりあえずは、首相の公式参拝問題や新しい国立追悼施設建設案をきっかけとして、この問題を政治的思惑から離れた観点からも論じる必要があるということについては、あるコンセンサスに達していると言えるだろうか。そういう意味で、波平恵美子『日本人の死のかたち―伝統儀礼から靖国まで』（朝日新聞社、2004年）のような本は、日本人の死者追悼の性質を知る手がかりとなる。太平

¹ 先に、町村信孝外相は就任後の記者会見で、首相の靖国神社参拝問題に関して「日本では、亡くなった人はすべて神であるとの死生観を持つのが普通の感覚ではないか」と述べた。政治的配慮にせよ、今後こうした発言が増えていくことが予想される。

洋戦争中に日本兵たちが、戦死者の遺骨や遺品を持ち帰るためにいかに努力したか、そしてそれが激戦の中、いかに困難をきわめたかが知られる。時には戦地の砂利が遺骨代わりにされることもあるが、それでも遺族は死者の「身体」にこだわる。そして、戦死者の霊は、遺体とは別に、靖国神社に祀られる。遺族が、最後に遺骨、遺品としてしか戦死者に出会えなかったことが、靖国神社への思いをいっそう強くしているといえるだろうか。

日本の政治的文脈との関わりは明らかでないが、意外なところから出てきたものとして、**真倫子川村編『日本の皆様、靖国神社を守って下さいーブラジルの中高生からの手紙』**(明成社、2004年)という本がある。これは、日系ブラジル人の教育家である著者が、主に日系ブラジル人の子供たちに、国立追悼施設構想についての感想文を書かせた本である。彼らは特攻隊の若者たちの純粋な心に感動し、つたない日本語で書いている。靖国神社に祀られている人たちのおかげで今の平和がある。靖国神社以外の追悼施設を作ることは、靖国に祀られている人を尊敬しなくなることで、日本人の誇りを傷つけることである…。

このような素朴な感想を突きつけられると面食らい、あらためて、靖国問題、追悼施設問題は、「情」の部分でコミットしやすい問題であるとわかる。そしてそれは容易に政治的文脈にリンクしていく。それだけに、もっぱら宗教的次元、心情的次元で追悼の意味を考えるにしても、歴史認識や内外の政治的状況の複雑さ・微妙さを出来るだけ慎重に受け止める注意が必要であると再認識されるのであ

る。

これまでに成熟してきた精緻な議論を踏まえて、「宗教という面から」のアプローチをとったのが、**菅原伸郎編『戦争と追悼』**(八朔社、2003年)である。首相の靖国神社公式参拝に反対する立場から、新しい追悼施設の可能を検討したものである。編者の菅原氏は、敵味方を区別しないで死者を供養する、仏教の「怨親平等」の理念をとりわけ重視する。靖国をはじめ、死者をカミとして祀る「神社」はどうしても敵味方を区別して、味方を顕彰・賛美する傾向が強いという点で、国の追悼施設として相応しくないという。逆に、平和を願う「かなしみの空間」として相応しいのは「墓」であるとされ、千鳥ヶ淵戦没者墓苑の意義が再評価されている²。

この本の執筆陣には浄土真宗、プロテスタントの宗教者が含まれ、様々な論点が出されている。概して、追悼懇の標榜する「無宗教」という言葉は乱暴な用法であると違和感をもって迎えられているようである。石橋湛山の靖国神社廃止論を参照しながら、千鳥ヶ淵戦没者墓苑の整備を唱える論(幸日出男)、鈴木大拙を引きながら、両大戦を経た人類の英知の結晶である日本国憲法の「戦争放棄」の象徴となるような国立施設を作るべきであるとする論(児玉暁洋)、「宗教者」と「国民」の立場がクロスした「公共の場」を意識して宗教者としての代案をしっかりと出すべきだと

² 次を参照。広池真一「「新たな国立墓苑」構想-「無名戦士の墓」と「怨親平等」をめぐる」『国際宗教研究所ニュースレター』36号、2002年。

いう論（池田行信）などがある。

中でも注目したいのは稲垣久和氏の議論である。氏の目的は、「日本近代史を自己批判的に踏まえた上で、日本思想の中に、戦後の憲法下で、良心の自由が補償される、そして異なる宗教やイデオロギーが多元的に共存する公共空間を生みだしていくこと」であるという。「他者への思いやり」「公共性」の対極にあるのは「同化」である。一方に同化するのではなく、神道、キリスト教といった、互いに異質な他者同士がともに共存することが目指されている。従来のキリスト教からの靖国批判は、個人的リベラリズムの観点から信教の自由を考えていたために、信仰を私的なものであるとして公共の場から排除するという特徴を持っていたが、それは、反対派に耳を貸さない靖国神社公式参拝推進派と同様に「他者感覚」が欠如しており、克服されるべきである。稲垣氏は、宗教者が内面に「絶対の他」を持ちつつ、「和して同ぜず」、非宗教者とも協働、対話しながら平和を作りだすことを唱えて論を締めくくっている。この主張は現実に実行する局面を想像すると多大な困難が予想されるのだが、ともあれ、内面的な信仰の自由論を超える視点を提供している点で貴重である。

『新しい追悼施設は必要か』は、以上のような流れを踏まえたところに出版されたことになる。この本の特徴の一つは、もとのシンポジウムの副題「若き宗教者の発言」に示されているように、各教団・宗派の慎重な公式見解ではなく、宗教界からのライヴ感覚での発言の記録であることである。真言宗、立正

佼成会、カトリック、神道からの発言者は新追悼施設に反対、創価学会は賛成という一応の総括では尽くせない議論が収められている。そして、宗教から問題に切り込みながらも、宗教心のみには拠って立つのではなく、過去から現在に至る政治的状況、また各教団、宗派の微妙な見解の揺れ、出版動向なども丁寧に押さえてあるので、年表や参考資料とともに有益な情報源となっている。

そしてなによりの特徴は、追悼施設問題をより大きな文化的文脈によって包囲して、議論を広く深くしようとしていることである。事例として、朝敵として死んだ白虎隊（今井昭彦論文）、広島・長崎の国立追悼施設（西村明論文）、沖縄の追悼儀礼（佐藤壮広論文）、欧米の戦没者記念施設（栗津賢太論文）が取り上げられている。靖国問題、新しい追悼施設問題が小休止しているかに見える現時点において、まさに時宜を得た、過去を振り返り問題点を整理しつつ、未来への展望を探るのに適した良書に仕上がったと言えよう。

最後に、もっとも近いところでは、『世界』（2004年9月号）が「靖国問題とは何か」を特集した。「靖国は日本の伝統から逸脱している」という梅原猛のインタビューや、「国家による追悼をめぐって」と題された島藺進と高橋哲哉の対談も収録されている。この特集においてもそうであるが、目下のところ、概して、新しい追悼施設の建設には慎重論が目立つようである。しかし、仮に自衛隊員の「戦死者」が出たら、国はどのような追悼をするのか。この問いはもはや非現実的とは言えないし、国によってどのような葬儀・追悼がな

されても、紛糾は必至であろう。こうした問題が政治の場で争われることがほぼ明らかであればこそ、いっそう、議論の多様な位相を誠実に踏まえた上で、宗教的角度から問題を見据える視線を確保しておくべきなのではないだろうか³。(たかはし・はら 国際宗教研究所研究員)

³ 本稿の脱稿後に発行された、真宗大谷派教学研究所『教化研究』133号(2004年10月)は、「非戦-国家の祭祀を問う-」というテーマのもと、靖国問題、戦死者祭祀の問題などを扱う特集号となっているので、参照されたい。